剣岳周遊①

北　　ア	真砂沢、長次郎谷、池の谷

山行期間：1993.5.29～6.1
メンバー：L酒井　正裕
　　石田　彰（農林山の会）

5月29日（晴後曇り）

平成元年に西仙人谷を滑った後，次は池ノ谷を滑ろうと試みたが，天候やメンバーに恵まれなかったため失敗の連続だった。
今回は５月末の天候の安定した時期を選び，石田と２人で行うことにした。

雑踏の室堂を立ち，雷鳥沢経由で剱御前に向かう。いつものことだが，しごかれる登りである。また，回を重ねる度に時間が余計かかるようになっている。この登りは自分の歳をいやというほど感じさせる。たどりついた小屋では，疲れて小１時間ほど寝てしまった。

大変気持ちが良くて，このままでいたいところだか，仕方なく剱御前小屋から，稜線をたどり別山を経由して巻道の出合う標高2800ｍ地点にでる。別山の巻道は途中のトラバースが悪く少し緊張させられた。ここは，素直に稜線をたどるべきだった。

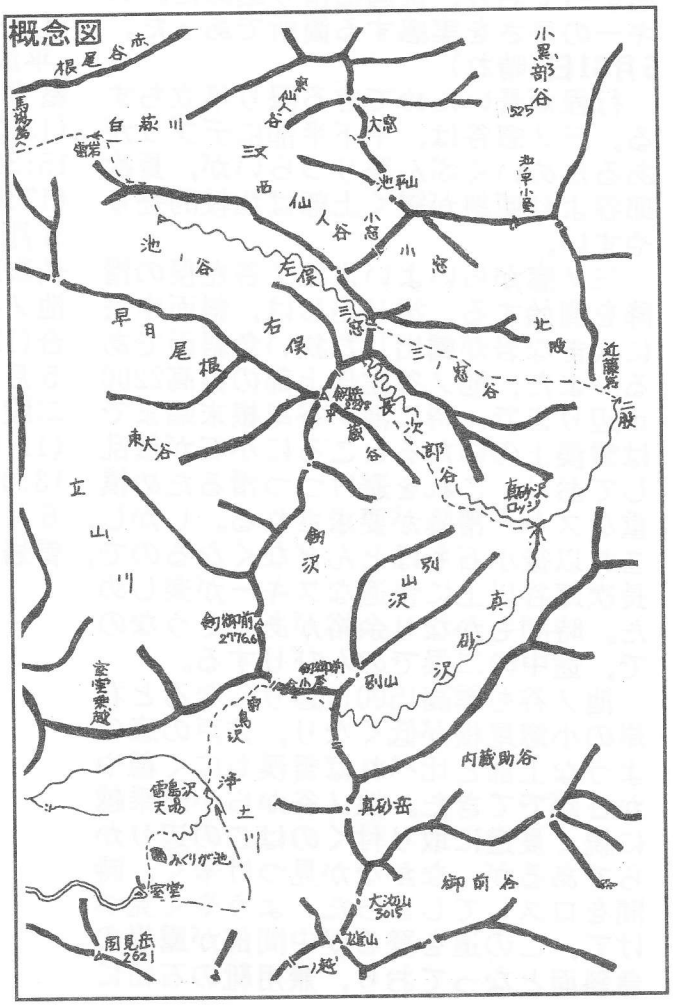
ここから，真砂沢のスキー滑降にかかる。真砂沢の源頭の滑り出しはやや急斜面ではあるが，摺鉢状の広い斜面は快適そのものだった。

剱沢の出合に着くと，やや下には真砂沢ロッジ跡の台地が見えたが，明日を考え，長次郎谷出合で幕営した。

5月30日（曇り）

長次郎谷出合から長次郎谷を登る。熊ノ岩までは緩く広い斜面の単調な雪渓の登高に終始する。ここからはガイドブックに紹介のない右俣を登る。

右俣は，上部に斜面を左右に二分する岩があり，右俣出合からこの岩辺りは稜線左からのデブリのため斜面中央が荒れ気味である。この岩の右を抜けると，稜線まであとわずかとなり，斜面の傾斜もますますきつくなる。



苦労して着いた池ノ谷乗越からは，当初滑ろうと考えていた池ノ谷ガリーは，覗いただけで自信がなくなり，池ノ谷の滑降は三ノ窓谷から回り込むことにした。

池ノ谷乗越からいよいよ長次郎谷右俣の滑降を開始する。滑り出しの標高差 200ｍは特に急斜面ではあるが，充分な広さがあり雪面も荒れていないので快適に滑ることができ，思いの外簡単に滑ることができた。

長次郎谷出合いのテントを撤収して一路二股に向かう。谷はほとんど雪に埋まっており，快適に滑り込めた。スキーの早さを実感する箇所であった。

5月31日(晴れ)

行程が長いためできる限り早立ちする。三ノ窓谷は，中下半部にデブリがあるためいくぶん登りづらいが，長次郎谷より傾斜が緩く上部は比較的登りやすい。

三ノ窓からいよいよ池ノ谷左俣の滑降を開始する。滑り出しは，斜面中央に大きな岩が露出した狭い急斜面である。また，池ノ谷左俣上部の標高2200ｍ辺りまで，特に池ノ谷尾根末端までは雪渓上のいたるところに小石が散乱しており，これを避けつつ滑るため慎重なスキー滑降が要求される。しかし，これ以後小石もほとんどなくなるので，長次郎谷以上に快適なスキーが楽しめた。時間もかなり余裕がありそうなので，途中の二俣でのんびりする。

池ノ谷も標高1500ｍ辺りになると右岸の小窓尾根が低くなり，井戸の底のような上部と比べれば雪渓も広く穏やかさがでてきた。池ノ谷から小窓乗越に続く夏道に取り付くのはこの辺りからであるが，なかなか見つけ辛く，時間をロスしてしまった。ようやく見つけて，この道を登るが中間部が露岩の急斜面となっており，兼用靴の石田には少し厳しすぎるようなので，ザイルを出す。このため，小窓乗越までは予想以上に時間がかかった。

小窓乗越からは，白萩川の雷岩をめがけて夏道を下降する。道は比較的明瞭であるが，急な道なのでスキーをひっかけないよう慎重に下る。

結局，雷岩に着いた時は時間切れで幕営することとなってしまった。

6月1日(晴れ)

今年は比較的雪が多く，白萩川の遡行が気に掛っていたが，思ったよりも楽であり，早々に馬場島に着いた。

【コースタイム】

平成５年５月２９日
室堂(10:00)雷鳥沢(10:40)剱御前(13:30/14:30)別山標高2800m(15:15/15:30)剱沢出合(16:10)長次郎谷出合(17:00)

５月３０日
長次郎谷出合(6:45)熊ノ岩下部(8:55)池ノ谷乗越(11:05/11:20)長次郎谷出合(12:05/13:50)二股(14:40)

５月３１日
二股(4:45)三ノ窓(10:10/10:35)二俣(11:05/12:10)池ノ谷1465m(12:20/13:00)小窓乗越(15:00)雷岩(17:30)

６月１日
雷岩(7:00)-馬場島(8:30)

(酒井正裕　記)